

卒後教育の試み

かとりなおみ
○香取尚美 生江麻代 望月泰男 山藤賢
(昭和医療技術専門学校)

【はじめに】医療の現場に限らず、現代社会において、入職後の社員の自己成長やモチベーションの向上には頭を悩ませる企業も多いのが実際である。我々教育機関の目的は、臨床検査技師の国家資格をとらせることではなく、医療人としての心を備えた臨床検査技師を社会に送り出すことである。本校では、学生時代からの心の絆を高める教育を、就職後の卒業生にも継続して応用することで、学舎としての学校の役割がさらに社会に貢献できるのではないかと考えており、その試みの一つについて報告する。

【目的】テーマは「共有からの創造」である。臨床検査技師として働きだした卒業生に対し、仕事での悩みや働き方などを、自分が一緒に学んできた仲間や、教員と共有し、あらためて情熱を持って働き出すということを目的に行った。自らが継続的に成長していけるような医療人になれるよう、本校において学生時代から一環して行っている医療人としての理念を社会人としての立場から考え直す機会とした。また我々教育機関側としても、現代の若者気質を知ると同時に、学生時代からはうかがい知れない、社会人になってからの個々の医療人としての悩みや、在り方を知るいい機会となった。

【対象と方法】卒後2年目の卒業生を対象に、秋に研修を行った。出席者は18名であり、その内訳は男性4名、女性14名であった。土曜の午後から夜まで、休憩を取りながらのワークとなり、終了後に懇親会も行ったが、同窓会として人を集めてはおらず、純粹に学びの場として、研修目的に自発的に集まったメンバーである。研修は、アイスブレイクを目的としたコミュニケーションワークから始まり、今までの仕事の振り返り、立場の置き換え作業から、自分自身の在り方、未来の自分の創造作業、最後は各々の宣言で終了した。研修はディスカッション中心のワークショップ形式で行った。

【結果】久々に会う仲間も多く、和気藹々とした雰囲気からのスタートであった。ペアを作る作業でも、仲のいい者同士を組み合わせたりはしないので、最初は、お互い様子をうかがいつつであったが、ワークをすすめるうちに、お互いの心の内を共有することができ、最後には、お互いに涙を流すような、あたたかい雰囲気の間となった。今回の研修から得られたものとしては、まずは、就職後の卒業生が、それぞれ抱えている悩みや、不安、現場で抱えている印象などが、本音の部分で知ることができた。これは、普段は仕事上の関係でしかない職場では打ち明けられない悩みでも、同じ学校で学んだ友人たちとは、本音で共有でき、許されるからであろう。また医療の現場での悩みは、専門領域なこともあり、家族などにも理解されづらい側面もある。そのあたりは、終了後の感想文からも感じ取れる部分であり、発表の際には、その感想の一部も紹介させていただく。

【考察】これまでも本学会において、本校が行っている、コミュニケーションワークの試みや、医療人としての心の在り方、心の絆を育む教育方針の一部を報告してきた。本校では入学前から卒業後までの一連のストーリーを大事にしている。学校という存在は、単なる学生時代だけの学舎ではない。社会に出た卒業生にとっても、いつでも、帰る場所であり、相談できるあたたかい場所であるべきであろう。そのような拠り所としての学校の機能について、卒業生から学ぶこと、与えられることはまだまだ数多くあると考える。